

地獄茶会 2018 特別対談

現代に地獄は可能か？

二人の僧侶が語る、現代からみた“地獄”。

—
4月14・15日にみたか井心亭で開催される、
「第四回 地獄茶会 ～原点回帰～」。
当日も地獄の世界で皆様を案内する二人の僧侶が
宗派を越えて地獄について語る特別対談。



対談場所：臨済宗妙心寺派 陽岳寺

—
地獄茶会案内人のお二人



●臨済宗妙心寺派 陽岳寺 副住職 向井真人
坐禅会・寺ヨガ・茶会などの企画運営、お寺発のボードゲームを考えるなど、有縁無縁の方々にお寺や仏教を活かしていただく方法を模索している。地獄茶会には今回案内人として初参加。



●浄土宗 蟠竜寺 副住職 吉田龍雄

ミュージシャンの叔父の影響で洋楽に興味をもち、表現する人になりたいと思うようになるも父が倒れ家業を継ぐ覚悟を決めたところ父が復帰、本山の増上寺に修行へ行く。増上寺では仏教との縁を深めてもらいたいという思いから、様々なお寺の行事を通じた活動をしており、現在も活動を続けている。増上寺にて開催した第2・3回地獄茶会から案内人を担当。

地獄にリアリティーを感じる人、感じない人

吉田氏 劇場茶会について初めて聞いた時、様々な方に仏教を通じて安心のタネを持って帰っていただくことにつながる行事だなと思いましたね。私自身が、これは本山でやるべきだと思い、2015年第二回地獄茶会、16年第三回地獄茶会を浄土宗 増上寺で開催する運びとなりました。

今回の第四回劇場茶会では初心にかえるということで、第一回開催の『みたか井心亭』に戻りまして、4月14・15日に開催の予定です。増上寺では私が案内人を担当しましたが、今回は臨済宗の向井さん、浄土真宗の平松さんに参加いただいて、様々な角度から伝えていければと考えています。

—— そうですね。第一回を三鷹で開催した時は、地獄というテーマに対して平安時代の地獄草紙と一休さんのお正月の逸話を題材として選び、「これからの一年を考えるきっかけとなる会」という趣旨で開催しました。ですがそのあと多くの資料を読んでいくうちに、仏教について深く学ぶ必要性を感じました。そこで第二回、三回は増上寺さん、吉田さんのご協力を得て、地獄に対する造詣を深めた会とすることができました。そして今回は初心にかえるということで、もうひとつ拵げた取り組みにしたいと考えています。

向井氏 臨済宗で地獄に関する有名なお話で、臨済宗中興の祖・白隠慧鶴（はくいん えかく）さんのエピソードがあります。白隠さんは子供のころは大層なやんちゃ坊主で、喧嘩をしたり、虫を潰したり、母親に対して嘘をついたりしていたそうですが、お寺で地獄の恐ろしさを聞いて改心し、お坊さんになる決意をしたそうです。このような悪さをすると、このような地獄に行く、ということを現代のお坊さんはあまり言わないと思いますが、臨済宗で地獄というとまずこのエピソードが思い浮かびます。

—— 現代でも、平成の前のお坊さんは地獄のお話しをしていたのでしょうか？

向井氏 昭和でも言っていなかったのではないのでしょうか。修行の中の講話で出ることはありますが。

吉田氏 現代では「後生を恐れる」という価値観が薄れたのではないかと思います。今生きている、今生で積んだ業によって来世の生まれ変わり先が決まる、という考え方が仏教にはありますが、僕ら浄土宗では根本的に後生を恐れます。「後生を恐れる」がゆえに、阿弥陀如来の救済を心から信じるという考え方です。「後生を恐れる」という考え方がないと、地獄は遠くにあるもの、自分とは関わりのない絵空事にしかなりえないのではないのでしょうか。



吉田氏 地獄をアナザーワールドとしての地獄と考えるのか、生きている世界の隣り合わせの地獄と考えるのかでも捉え方が変わってきますよね。現状に不満なく暮らしている人にとっては、地獄や極楽を考えることはないと思うのですが、人は病気にもなるし怪我もする。様々な理由で人間は簡単につまずくことがあります。そのことに気が付いた時、「たまたまそうだったんだ」と考えるか、「ままならない世界で生きている」ということに思いがいたるか。その様な時に、大きな流れがあると想像できるかどうか、地獄を感じられる前提としてとても大きいと思います。

浄土宗では極楽浄土の実存を信じているので、地獄も実際にあると考えています。そして自分自身や人間という存在は地獄に当然堕ちるようなものである、という自覚の元で日々を生きています。今回の劇場茶会においても、その地獄のある種具現化、表現することに意味を感じています。ただ、現代では地獄が荒唐無稽に聞こえてしまうのは、ちょっと悲しいですね。

生まれることから、 死ぬことから離れている現代

向井氏 現実には地獄を見出す、ということはあるですか？

吉田氏 我々の感覚からすると、「地獄の様な」ということならあります。例えば、災害の現場はそうでしょうし、こちらの陽岳寺さんが戦災で焼けた際も、この世が地獄の様であったと思います。我々の解釈でいうと、地獄の様な現実が死後永遠に続くと思うことへの恐怖感は、現在に伝わる地獄観が作られた平安時代は、現代に比べて大きかったのではないかと思います。リアルにそれを感じられる感性は、だんだん鈍くなっているのではと思います。リアルだと思える人と思えない人がいる中でリアルに見せることに意味はあると思います。

—— 時代に合わせて考え方や説き方、表現を変化させることはあったのでしょうか。

吉田氏 定められたものは普遍性がある教えだ、と考えるので真理は変化しないと思っています。大きく時代によって変えていることは、浄土宗では江戸以降は変えていないと思いますね。
ただ、どの宗派でも現代の人にどう受容されるか、という点は工夫が必要だと感じているので、向井さんはボードゲームを作られたり、私であれば様々な行事を催したりしています。

向井氏 どの宗派も普遍的な部分は変わらないけども世相に合わせて言い方を変えるということはやっていると思います。従来の地獄観は江戸時代くらいまでは信じられていたかもしれませんが、明治以降に考え方が変わる中で本質的なことをどう伝えるかという工夫は、様々な方がされていたと思います。



—— 現代では、どう生きるかや、どう成功するかは考えるけど、死んだらどうなるかとか、死そのものについてあまり考えていないような気がします。

吉田氏 必ず生まれたら死にますが、生きている時に死ぬと思って生きている人はあまりいないですよ。死ぬということから目を背けて生きられる世の中になったのだと思います。それはそれで、危機がないという意味では幸せなのかもしれません。ただ現実の危機がない分、意識しないと気づかないものになっているのではないかと思います。生まれるのも病院、死ぬのも病院だと、我々は生まれることも知らず、死ぬことも知らず暮らしていることになります。

現在に伝わる地獄観が作られた平安時代は、死が当たり前の時代でした。周りの人が次々と死んでいくなか、命は無常であるという感覚で生きていたのだらうと思います。現代は幸せになったが故に、生きることを知らずに生きているのではないのでしょうか。

向井さんは、死についてはどうお考えですか。

向井氏 死んだらどうなるかわからないですよ。臨済宗は禅宗なのですが、「不立文字・教外別伝・直指人心・見性成佛」という言葉があります。教えられるままではなく自ら気づくこと、体験によって得られることを大事にしろという教えです。經典に書いてある地獄のことを、純粹に信じたり信じなかったりしているわけではありません。お釈迦様や仏様によるお言葉がお経ですから、自分の体験ではありません。そこをどう腹落ちするかが禅宗です。自分の見たことだけを信じるのも傲慢。昔の人だからと信じるのも傲慢とも考えられます。簡単には答えは出ないのです。

吉田氏 その答えを絶えず探して行くために、臨済宗では座るのでしょうし、浄土宗では答えを得られない自分、という自覚の元に救いを求める。

向井氏 浄土宗では、その根拠はどこにあるのですか？

吉田氏 それは経文ですね。浄土三部経と言われているお経に準拠しています。経律論（きょうりつろん）というのがありまして、仏の教えである経、守るべきルールである律、どう解釈するか論、この三つを合わせて三蔵と言いますが、浄土宗ですと『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』を根本経典としています。また、中国の唐の時代の善導大師による『観無量寿経』の解説書『観無量寿経疏』（かんむりょうじゅきょうしよ）という書がありまして、これにより読み解くことが浄土宗の根本になっています。

向井氏 世界観があるというのは強いですね。

吉田氏 世界観が現代と合わないファンタジーになってしまうのが、難しいところですね。極楽浄土自体も、お経に書かれているこういう池があって、こういう木が生えていて、こういう楼閣があって、常に風が吹いていて、空には菩薩様が舞っていて...と書いてある。様々な七宝でできた木が輝いている、という記述もあります。そのまま受け取ってしまうと、陳腐だよね、俗っぽいよね、という感じ方もできます。具体的に記述されているものについては、その時代でできる限りの言葉をつくして表現しているということを、読む側が考慮しなければならないと思います。

向井氏 当時の人が読んで感じることを想定して書かれている。



吉田氏 地獄についても、想像しうる最高の苦痛として針の山とか血の池地獄などが描かれている。そういったことに常に苛まれる世界がある、ということが「後生を恐れる」に繋がって行くのだと思います。そしてまた、親しい人との死別など受容しきれない悲しみが起きた時に、この世を地獄のように感じてしまうことがある。受容しきれない悲しみというのは、平安の時代も現代もいつの時代にもあることだと思います。

向井氏 地獄のお話を色々読んでいるとすごく辛くなるのですが、受け止めきれないことが書かれているからなのかもしれません。受容しきれない悲しみというのが地獄の本質なのかもしれませんね。身近なところでは、お地藏様は「代受苦（だいじゅく）」という、苦しみを代わりに受けることを誓っている菩薩ですね。

吉田氏 我々が受け止めきれない苦しみを肩代わりしてくれる安心感が、昔から身近に信仰されている理

由なのかもしれません。

向井氏 地獄や極楽の記述がそのまま信じられるかというと、現代に生きている人には自然ではないのかもしれませんが、死後の世界観を持っているということは安心を得るという意味では大事なこともあるかもしれません。現代では、死んだ後どうなるかというより、今どう生きるかを考えている人が多いと思いますが、平安の昔も、多くの人は生きることに精一杯で死後のことを考える余裕は無かったのではないのでしょうか。けれども、生きる辛さに絶えきれず死後の世界観の話聞き、生を見つめ直す。生死の世界観をもつことで、日々を生き抜く力を得る、助かるということはあるのだと思います。



吉田氏 他の宗教でも、特徴的な死後の世界観がありますよね。その世界観を共有できる環境で宗教はできてきたのかもしれませんが。そういった環境というものは時間とともに変化して行く。自分たちが今生きている世の中で、その世界観をどのように見るかということは絶えず問われなければいけないし、問われるために具現化するということはあっても良いかなと思います。こうじゃないか？と思うところから気づきを得て考えが深まる、お茶の見立ての話につながるのかもしれない。

向井氏 現実世界には受け止めきれない苦しみがあるという事実があり、そこから死後ノコギリで引かれるとか、鳥についばまれるなどの地獄の世界観が生まれてきた。すでに表現された世界観から意図やポイントを読み取ることは大事ですが、お茶会を組み立てる場合は逆ですね。まずテーマがあって、どのように広げていくか。劇場茶会では両方できたら面白いと思います。

吉田氏 今回の劇場茶会は両方が入っているので、色々なところに網がかかっている感じがしますね。

向井氏 どちらからでも入れますね。



地獄茶会 一原点回歸一

2018年4月14日(土)、15日(日)

於：みたか井心亭／三鷹市

4月14日(土) 和英同時通訳あり

第一席 12時

第二席 14時 (満員御礼)

第三席 16時

第四席 18時

4月15日(日)

第一席 11時

第二席 13時

第三席 15時

第四席 17時

詳細・お申し込みはこちらから

<https://www.gekicha.net/>